



編集・発行 カトリック幟町教会 (宣教企画部 広報係)
 チームミニストリー：後藤正史神父(モデラートル), アルベルト神父, スティーブ神父
 〒730-0016 広島市中区幟町4番42号
 TEL (082)221-0621 FAX (082)221-8486
<http://www.nobori-cho-catholic.com>

2011年9月号 No.435

わたしたちは人として生まれ、人となっていきます。それがわたしたちの一生といってもいいのではないのでしょうか。確かに良き賜物をいただきながらも、それに気付かない場合があるようです。特に他の人と自分を比べたり、比べられると、自分自身の立ち位置が分からなくなってしまうことしばしばです。

人となっていくのを助ける場が家庭であり、学校であり、地域であり、社会であり、世界でしょう。周りの人々の助けなくして、わたしたちの歩み道は十分に整えられません。先ほど挙げた共同体が、しっかりそれぞれの役割を果たしていないとしても、この世で生きていくための人間関係の基礎を形作っていきます。

現代の日本社会では、キレやすい子ども、不登校の子ども、引きこもりの人、また心を病んでいる人が増大し、自ら命を絶つ人々が毎日百人近くにも達しているのが現実です。甚大な被害をもたらした(もたらし続けている)3・11

人として生まれ、 人になっていく道 楽しさつらさを共に

シメオン
後藤正史神父



大震災を機に、人と人とのきずながいかにわたしたち人間にとって大切なものか再確認し、ないがしろにしてきたきずなを取り戻し、あるいは新たに結ぼうとしているのは希望に満ちた未来への礎となるでしょう。

わたしが司祭となった頃は、親子そろって、日曜日、教会に足を運ぶ家庭はめずらしくありませんでしたが、現在は親も子どもも何やかや(パート仕事、クラブ、塾など)でとにかく忙しい状態です。今年は日曜学校の新1年生が2人だけで、主なお母さんリーダーの半分は外国人となりました。この現実を、単に残念と嘆くのではなく、わたしたち教会に与えられたチャレン

ジとして前向きにとらえたいと思います。

渇き、悩み苦しむ人々の中におられる主イエスの声を聞き分けられるようになったら、どんなに幸いでしょう。どんな時も、主イエスの語りかけを聞きながら、わたしたちが寄り集い、分かち合っていけたら、どんなに幸いでしょう。互いに愛し合い、他者の苦しみや喜びに寄り添いながら歩んでいきたい。共に神に賛美と感謝を捧げて、自旨ではなく、御旨に添って歩んでいきたい。

わたしたちが人となっていく道は、第二バチカン公会議の現代世界憲章の冒頭に簡潔にまとめられています。「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。」わたしたち広島教区三本柱の一つ、「養成」(人となっていくこと)は教会内外の人々の出会い、交わり、共感、共苦の中で実現していく道中で、なされていくものでしょう。

8 月 5 日の平和行事のシンポジウムで、信徒 Y Y さんが、被爆の体験と想いを発表しました。その内容を抜粋して紹介します。

私は 12 歳で被爆し、周囲の人々が次々と亡くなっていくなか、「ピカにおうたもんは 3 年以内にみんな死ぬ」などと噂され、私もいつ髪がぬけ始めるか、紫斑が出るかなどビクビクしながら、自分の生きた証しを書き残しておかなくてはと、1 冊のノートの手記「閃光のあと」にまとめました(『戦争は人間のしわざです』(カトリック正義と平和協議会、1991)収録)

日清戦争のとき、宇品港から軍の物資を大陸に送るため、広島に大本営が移され、以来、広島は軍都としての位置づけが大きくなりました。太平洋戦争末期、戦力外として残っていた 中学校・女学校の 3・4 年生は軍関係の仕事に動員され、1・2 年生は、食糧生産作業や軍事教練、そして建物疎開の作業でした。

あの8月6日から、市内の中1・2年生が一斉に建物疎開作業に当たるよう、軍の命令がありました。約8千人の生徒が動員され、うち6千人以上の子ど

証 1945-2011 (未来への責任 2011)

もが無惨にも未来を奪われました。私の家は市街地にあり、家族5人(両親・祖母・姉二人)そして国民学校の友人たちのほとんどを失いました。

保護者も家も着替え一つもなくなった、私たち子ども、いわゆる原爆孤児が、その後も飢えと、病や死の恐怖、窮乏・差別の中で生きていかねばならなかったのです。

そして、我が子を探す親たち、また家にぼろぼろの姿でたどりついた後息絶えた子の家族の嘆きは、続きました。

やがて敗戦・占領、私たちは耐えるしかありませんでした。「ピカのことを言うたらMP(憲兵)にひっぱられる」との噂でしたが、それより何より、もう思い出したくない、と固く口を閉ざしてあの時のことを話す人は周囲にはいませんでした。

「被爆の証言」に関わったきっかけは、被爆後30年の1975年夏、被爆者でない方たちが、“広島の責務”として働こうと「平和を願う会」を設立して呼び掛けられ、その活動に参加してからです。会は、祈り・学習・活動を三本の柱としました。まず、幟町教会で被爆されたラサール神父、チースリク神

父、長束で被爆者救助に当たったアルペ神父、そして被爆直後に手記を書かれたジメス神父、外国人宣教師4人の被爆体験手記を『破壊の日』として出版しました。

その後「平和を願う会」が「正義と平和広島協議会」に改組され、『戦争は人間のしわざです』を出版しました。これは、4人の「宣教師の見たその日」と、31人の被爆とその後、そして世界平和記念聖堂建設にまつわる証言の記録です。当時のメンバーが、大変な苦労をして証言を集めて回りましたが、今では遺言となった方も多く、後世に残る広島教区の宝だと思っています。

1954年にビキニ環礁での水爆実験による第5福竜丸の被爆をきっかけに、原水爆禁止運動がおこり、1955年に広島で第1回の原水爆禁止世界大会が行われました。

ところが同じ頃に「原子力の平和利用」の流れが始まっていたのでした。1955年に原子力基本法などが成立し、1957年には茨城県東海村の実験炉で、日本初の「原子力の火」がともったとあります。以後「核の平和利用」を旗印に、原子

力政策が推進されてきたことを、その頃の私は全く知りませんでした。

初めて原子力発電の存在と向きあうことになったのは「平和を願う会」の活動の中です。大量に溜まっていた原発の核廃棄物を、ドラム缶に詰めて南太平洋に投棄する計画があり、島々で激しい反対運動が起っていることを、現地におられたメルセス会のシスター清水から知らされました。私たちは“核廃棄物、海洋投棄反対署名”の運動を始め、全国

的な活動となりました。核の海洋投棄は中止となり、その後も処理の方法のないまま、核廃棄物は溜まり続けています。

朝日新聞社山口支局が出版した『国策の行方 上関原発計画の20年』を読み、心が震えました。長年、上関のことを知らずに過ごしたことへの贖罪と、高齢化しながら30年近く、今も戦っておられる方たちへの敬意と、感謝の念をもって、その後は自分なりに行動してきました。

今年の3月11日、怖れてい

た、あつてはならない大事故。報道の度に原発はどうかと気にかかり、原子力政策の転換を願い祈り続けてきたのに…と、涙が止まりませんでした。広がるばかりの被害に心を痛め、この事態を受けてもなお、国策を変えることのできない政・官・産業界の姿勢、何ともどかしい限りと思います。

私たちは 今、苦しみの中にある方たちのために、祈り、支え、後々の世代のために、連帯して、賢明に動きたいと願っています。

めいばい楽しんだサマー・キャンプ



今年は、久々に幟町教会でサマーキャンプを行いました。青年がスクラム組んで、子ども達をいっぱい楽しませてくれました！

ファミリープール・バーベキュー・花火・肝だめし・ミサ・平和学習・流しそうめん・レクリエーション…。ここ何年も、保護者がキャンプのリーダーもしていましたが、今年は子ども達の活動は、青年がリードしてくれ、保護者は裏方に徹する事ができました。(こちらもスクラム組んで、楽しく頑張りました☆)それから、今年は幟町でのキャンプだったので、これまでのような差し入れに加えて…、キャンプ中、信徒の皆さんがよく声をかけてくださったり、バーベキューに参加してくださったり、準備から片付けまでスタッフ以上に尽力してくださったり…と、ありがたい応援が沢山ありました！

2日間めいっぱい遊んで、友達とはもっと仲良くなれ、信徒の皆さんとも交わって、神様の恵みを肌で感じたキャンプだったと思います。ありがとうございましたm()m。(保護者)

【記者の目】オジャマ虫

今年もオジャマ虫で参加した。今年も中高生・青年たちの世話係の姿は立派で頼もしく、『将来の教会をこの子達が担ってくれるのだろうか…』と、期待させてくれる。子供たち、親御さんたちの国際化も定着してきている。半数近くが日本人以外または外国生まれ。教会戸籍上の数では圧倒的に日本人の方が多いのだが参加率が極端に低いのは、致し方ないのだろうか？

一番大切なポジション

楽しそうに、はしゃぎ廻る子供たち、お世話に奔走する中高生・青年そして親御さんたちの姿を見ながら想ったのは、教会活動の中で一番大切なことは？と問われたら迷わず「この子達、中高生・青年、そして関わる方々への徹底的な支援！」と答えるだろう。「子供や若い人が少ない」と危惧する声はたびたび耳にするが、将来に対する具体的な思索を私たちは実行しているのだろうか？今年も明日の教会を鑑みながらのオジャマ虫でした。(の)



さとうきび畑

チャリティーコンサート

「ざわわ、ざわわ、ざわわ…」のフレーズで有名な「さとうきび畑」の歌は 1967 年、沖縄のさとうきび畑の土の下に埋もれたままの戦没者たちの魂に揺り動かされるように寺島尚彦氏が書き上げたものです。この平和への祈りを発信し続けるため、沖縄・読谷村に歌碑を建立するためチャリティー・コンサートが開かれます。収益金は歌碑建立のほか、東北支援・聖堂保存に充てられます。ぜひ、お越しください。

●日時: 9月 25 日(日)午後 2 時～4 時

●場所: 世界平和記念聖堂

●料金: 大人 1,000 円・高校生以下 500 円(チケットはヤマハ楽器、カワイ楽器、デオデオ店の各プレイガイドでお求めいただけます。)

●出演: 寺島夕紗子さん(ソプラノ歌手。「さとうきび畑」の作詞作曲者、故寺島尚彦さんの娘でカトリック信徒)



編集後記



三末司教様が退任されます。声をかけると必ず「あー、あなた！」と笑顔で応じてくださいました。名前覚えていないんだろうな、と思いつつ、相手を傷つけない配慮ある言い方ね、と感心したものです。また、広報係としてお話を伺ったときに誠実と配慮の備わったお方だということをしみじみ感じたのを思い出します。わたしはこの司教様が大好きでした。教区のためにご尽力いただきありがとうございました。

(お)

